

## アジアの新時代 日本が問われるもの



若宮 啓文 (わかみや よしむみ)

日本国際交流センターシニア・フェロー、前朝日新聞主筆。著書に『和解とナショナリズム』『新聞記者—現代史を記録する』など。

「アジアの時代」と言われる21世紀。特に「日中韓」の北東アジア三カ国は、地理的、文化的、経済的な近さによって大きな可能性を秘めている。ところが、昨年来この国々に新政権が生まれながら、燃え上がった領土問題や歴史認識の溝のため、「日中韓」サミットはおろか「日中」「日韓」の首脳会談すらできない。韓国のパク・クネ大統領はこうした状況を「アジア・パラドックス」と呼ぶ。中国の経済的台頭と広がる社会矛盾、韓国のポピュリズム的な民主化、そして中韓関係の緊密化などが「反日ナショナリズム」を膨らませているのは間違いない。だが、対抗するように「強い日本」回復を掲げる安倍政権が中韓を刺激する悪循環も否定できない。第二次大戦後、米国との関係を基盤に経済力と平和路線でアジアをリードしてきた日本は、いまアジアの急激な構造変化の中で何を問われているのか。これから、どんな道を歩むべきなのか。



司会 それでは午後のプログラムを開始します。私は、本シンポジウム実行委員長の経営学部の田中則仁と申します。よろしく申し上げます。

おそらく今日いらっしゃる方のお目当ては、お二人の記念講演者ではないでしょうか。アジア研究センター開設記念講演の1番目のスピーカーとして、若宮啓文先生をご紹介します。

若宮先生は、公益財団法人日本国際交流センターのシニア・フェローで、本年1月まで朝日新聞の主筆として健筆をふるわれ、わが国を代表するオピニオン・リーダーでいらっしゃいます。本日の記念講演のタイトルは「アジアの新時代 日本が問われるもの」です。それでは若宮先生、よろしく申し上げます。

若宮先生は、公益財団法人日本国際交流センターのシニア・フェローで、本年1月まで朝日新聞の主筆として健筆をふるわれ、わが国を代表するオピニオン・リーダーでいらっしゃいます。本日の記念講演のタイトルは「アジアの新時代 日本が問われるもの」です。それでは若宮先生、よろしく申し上げます。



若宮 皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた若宮です。まずは何をさておき、神奈川大学アジア研究センターがめでたく開設されたことに、心からお喜び申し上げます。また、外国からも錚々たるゲストにいらしていただいております。私からも歓迎したいと思います。そういう中でお話しできる

機会をいただいたことを、たいへん光栄に思います。私は今年の1月まで43年弱、新聞記者をいたしました。最初に赴任したのが横浜支局でした。1970年ですから、ベトナム戦争のさなかです。今日はベトナムからの先生もいらしていますが、神奈川大学のキャンパスにもベトナム戦争反対の看板がたくさん並んでいた時代です。当時、神奈川大学の取材に来たこともありますので、たいへん懐かしく、今日拝見してずいぶん新しい建物があるなど、感慨を新たにしたところです。

機会をいただいたことを、たいへん光栄に思います。

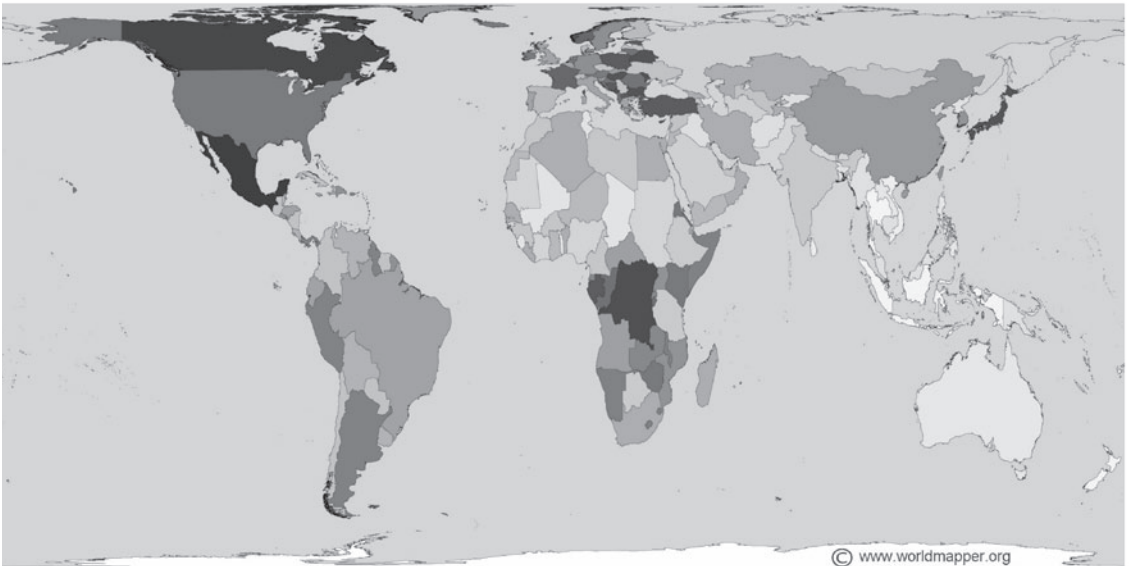
午前中に、優れたパネリストの方々の興味深いお話があったので、私も聞きながら勉強になりましたし、共感するところもたいへん多く、そういうお話を踏まえて私の話も聞いていただくと、より分かりやすいのではと思いました。今日は、地図を5枚用意しました。この地図を見ながら話を進めていきたいと思います。このうち最初から4枚は、インターネットで検索したWorld Mapperによるものです。実は最近、ある学者さんから教わったもので、興味深いので皆さんにご紹介しようと思いました。

異なった地図から世界を眺めてみると、まず、一枚目は普通の世界地図です(図1)。日本の教科書で見る地図では日本が真ん中にありますが、これはヨーロッパが中心です。面積は、ロシアが一番大きく、カナダ、アメリカ、中国、ブラジル、オーストラリア、インドという順に

異なった地図から世界を眺めてみると

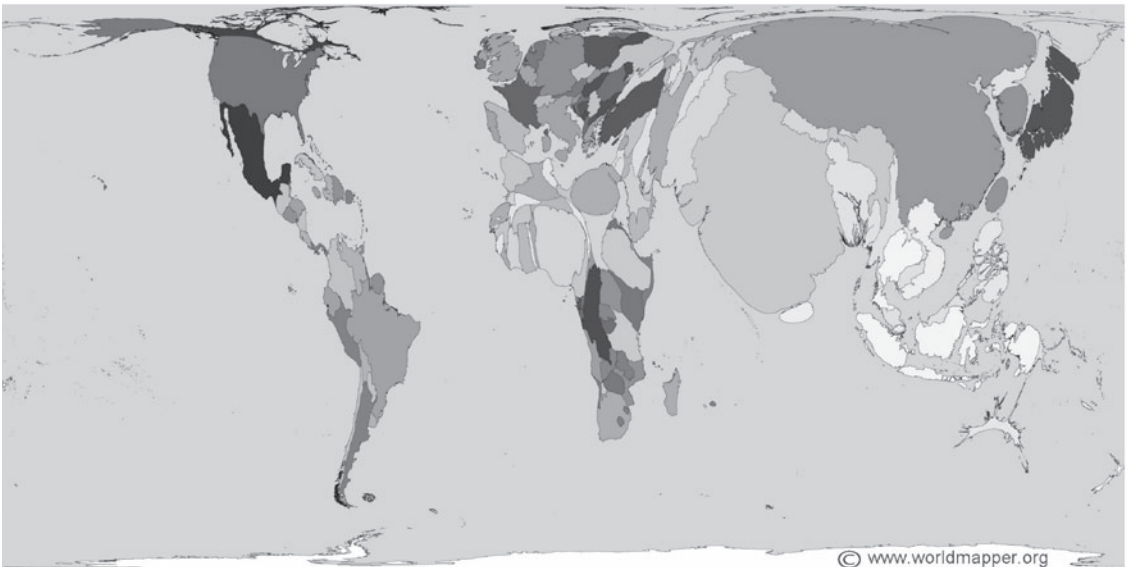
まず、一枚目は普通の世界地図です(図1)。日本の教科書で見る地図では日本が真ん中にありますが、これはヨーロッパが中心です。面積は、ロシアが一番大きく、カナダ、アメリカ、中国、ブラジル、オーストラリア、インドという順に

図1 世界地図



© Copyright Sasi Group (University of Sheffield); and Mark Newman (University of Michigan)

図2 人口別(2002)



© Copyright Sasi Group (University of Sheffield); and Mark Newman (University of Michigan)

なっており、日本は60番目くらいです。

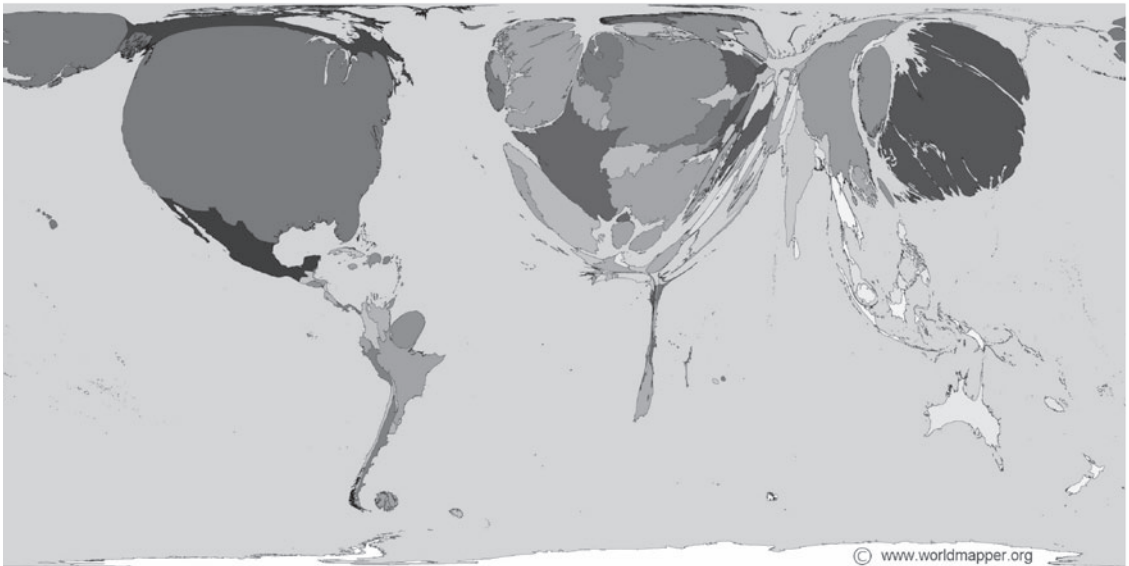
標準の地図の面積を人口に置き替えてみます(図2)。中国とインドが膨れ上がりました。日本や韓国、台湾なども、それなりに大きくなった感じがします。東南アジアの国々を含めて、いかにアジアに人口が集中しているかが分かります。

次に、2002年の各国のGDPを地図にしてみます

(図3)。ずいぶん印象が変わりました。アフリカが、ワイングラスの取っ手のような小さな棒になりました。北アメリカは、さすがに大きいですね。右の端が日本です。世界の富が、真ん中の欧州とアメリカ、そして日本に集中していたことが分かります。

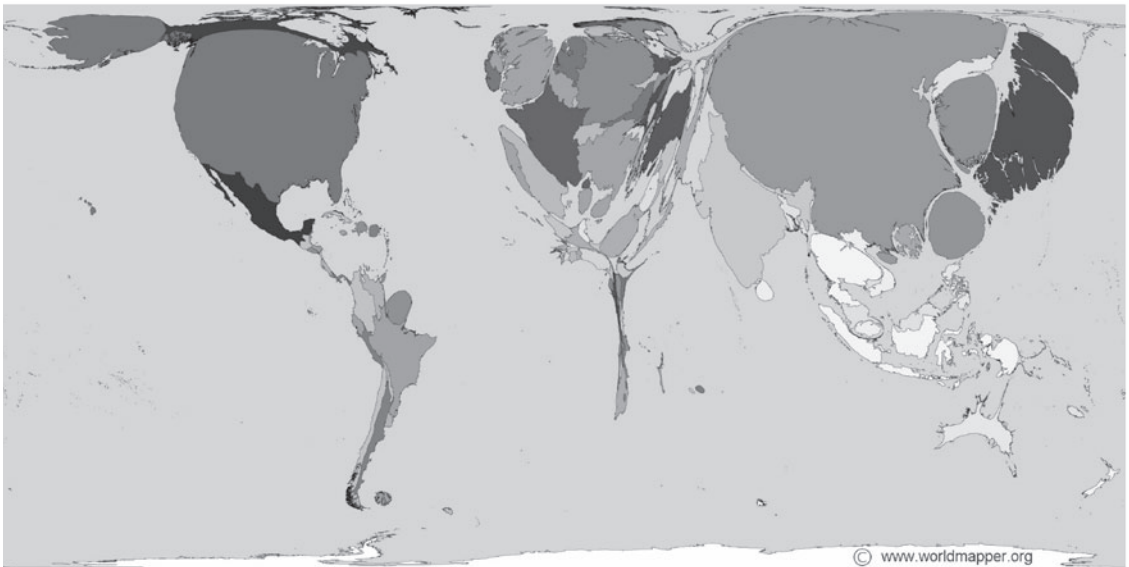
これらの地図は、アメリカの学者たちが知恵を

図3 国内総生産(GDP) (2002)



© Copyright Sasi Group (University of Sheffield) and Mark Newman (University of Michigan)

図4 国内総生産(GDP) (2015)



© Copyright Sasi Group (University of Sheffield) and Mark Newman (University of Michigan)

絞り、300以上の指標で作っています。中にはアフリカが大きくなる地図もあります。それは10歳から14歳までの労働力、つまりワーキング・チルドレンのものです。その数を地図にすると、アフリカはものすごく大きな大陸になります。

2015年におけるGDPの予測値を地図にしてみると、中国がアメリカより大きく見えます(図4)。

少し前に予測したものだけに、ちょっとテンポが速すぎますが、いずれはこうになるのでしょう。トレンドがよく分かる地図です。

ここで意外に大きいのが韓国、台湾です。東南アジアもがんばってます。中国のGDPが日本を抜いたのは2010年ですが、どんどん差をつけていく様子が伺えます。世界は大きな転換点を迎えてお

り、富、エネルギー、力がアジアを中心に動き始めていることが分かります。今日もアメリカのアジア回帰が議論になりましたが、この地図を見れば当然のことと思います。

### 日中韓のアジア・パラドックス

天皇陛下・皇后陛下がインドを訪問して、たいへんな歓迎を受けました。また、安倍総理は、就任以来、1年の間にASEAN諸国をすべて訪問しました。台風30号によるフィリピンの大災害には大規模な支援体制が組まれました。いかに日本がアジアを重視しているかということです。しかし残念なことに、一番近い中国と韓国に安倍総理は行っていません。向こうの首脳も日本に来ていません。それどころか、第三国で顔を合わせても会談をすることがありません。今年の5月にはソウルでの日中韓サミットが予定されましたが、それも流れて、いつ開かれるか見通しもたっていません。

これだけ日中韓の貿易関係が入り組み、人的な交流も増えたのに、政治の関係がうまくいかない。この異常な状態を、朴槿恵大統領は「アジア・パラドックス」と呼んでいます。その主な原因は、日本の歴史認識にあると朴槿恵大統領は言います。

一方、中国と韓国の間は基本的にうまくいっています。朴槿恵大統領は中国に行って大歓迎を受けました。中国語で演説までしています。そういう中で、日中と日韓がうまくいかない。それは日本の責任だと言われます。歴史問題だけでなく、そこには領土問題もあるのはご存じのとおりです。しかしその領土問題も、歴史問題と密接からんでいるので、どうしても歴史問題がクローズアップされます。

確かに、日本の歴史認識が大きな問題であるのは間違いありません。ただ、私にはそれだけだとは思えません。今日の李元徳先生のお話にもあったように、そこには大きな構造的な問題があるのではないのでしょうか。朴槿恵大統領の「アジア・パラドックス」という言葉を借りるなら、日中韓の3国はそれぞれに内的なパラドックスを抱えています。それが、3国の関係を難しくしている要因だと思われます。

まず中国はどうか。中国の最大のパラドックスは、中国共産党の一党支配のもとで資本主義的な

経済発展を進めていることです。これは初めての実験でもあり、そこからさまざまな問題が起きています。かつて中国は経済成長のために日本と手を結び、日本の資本や技術、さらにはODAも獲得して、今日の経済成長を成し遂げてきました。鄧小平氏の有名な言葉に、「韜光養晦（とうこうようかい）」があります。ひらたく言えば、力をつけるまではじっと我慢をしようということです。中国が成長する間、日本はせいっぱい協力してきた。

ところが今、習近平主席は「中華民族の偉大な復興こそが中国の夢だ」と語ります。そこには、近代史の中で中国が西欧諸国だけではなく、こともあろうに隣国の日本の軍国主義にまで痛めつけられ、屈辱的な目にあったという記憶が消えずに残っています。いずれ見返すときが来る、いや今こそその時だという気分が、中国にはあるのではないのでしょうか。そうした気分を一党支配の共産党が統治に利用している面がなしとしません。

ただ、膨張主義的とも思える軍の行動が防空識別圏のような形になって現れる一方、中国経済がさらに成長していくには、国際協調もゆるがせにできません。国内の安定的な発展も必要です。そのへんの調整がなかなか難しいというのも、中国のパラドックスです。

韓国はどうでしょう。韓国は民主化されて久しく、もう20年以上です。それはたいへん結構なことですが、かつて軍事政権のときに結んだ日韓基本条約で抑え込んだり見過ごされていたことが、民主化の結果、さらけ出されて改めて問題化し、対日関係を難しくしています。それもまたパラドックスではないでしょうか。

1965年に日韓基本条約が結ばれた当時、韓国は北朝鮮と経済力において低レベルで競り合うような状況でした。だからこそ、朴槿恵大統領の父である朴正熙大統領は日本と手を結び、日本から経済協力を得ることによって経済発展を目指しました。その結果、「漢江の奇跡」と呼ばれる急速な経済発展を成し遂げることができました。漢江（ハンガン）はソウルを流れる大きな川です。

図3の2002年は日韓ワールドカップが共催された年でした。この図によれば日韓の経済力にはまだ大きな差がありましたが、北朝鮮には比較にならないほどの差をつけています。「漢江の奇跡」に見るように、朴正熙大統領の当時の選択は正し



かったと言えるでしょう。しかし、その先に達成された民主化によって日韓基本条約が内包していた問題が出てきたというのも、皮肉なことです。

日中国交正常化がなされたのは1972年です。当時は文化大革命のころですから、経済力を地図にすれば中国はずっと貧弱だったになるに違いありません。ちなみに、1500年の富を推測して作った地図もあります。それによれば中国がものすごく大きい。中国がかつての夢を追うというのは、そういうことです。インドも大きい。アメリカ合衆国はもちろんまだ存在していないので、北アメリカは非常に細い。

話を戻します。韓国は日韓基本条約によって大きな発展を遂げたのは間違いないのですが、当時は、謝罪もしない日本に、お金のために頭を下げるのかと言って学生たちが大反対のデモを起しました。それを、非常戒厳令までして押さえて結んだのが日韓基本条約です。そのようなことがあるので、当時とはまったく時代が変わった韓国で、65年に結んだ条約だけですべてすますのが難しくなっている。それは時代の自然の流れです。日本では、日韓基本条約ですべて終わったと思いがちですが、そういう時代の変化が現れています。そして、朴正熙大統領の娘でありながら、民主化された韓国で政権を執っているという朴槿恵大統領その人に、韓国のパラドックスが象徴されているような気がします。

日本はアジアに本当に向き合ってきたのか

さて、日本のパラドックスは何でしょうか。それは、アジアを侵略した責任を、アジアの国々によって裁かれることのないまま、あるいは明確に謝罪することが長い間ないまま、冷戦の中で恵まれたポジションを得て、経済成長を果たしてきた。そのことにあるのではないのでしょうか。そのつけが、今、アジアの大転換の時代に回ってきているということではないのでしょうか。

先ほども申しあげたように、日韓基本条約も、日中国交正常化、あるいはその後の日中平和友好条約も、GDPの地図が極めていびつで、日本だけが大きかった時代に結ばれたものです。政治的にいうと、ソ連という共通の脅威が北に存在した時代です。韓国にとっては、ソ連だけではなく、中国もたいへんな敵対国でした。そのため、日本と手を結ぶのは戦略的に自然のことでしたが、こん

にちでは中国と韓国の関係はまったく変わってしまいました。そういうことに、日本人は認識を新たにしなければいけないと思います。

冷戦が終わった90年代になって、それはちょうど韓国が民主化された時期でもあるのですが、日本の総理大臣が次々に謝罪をしました。戦後50年に当たってなされた95年の村山富市総理大臣の談話が、謝罪の決定版でした。それは、戦後の恵まれた状況において、不自然な形で日本が発展を享受していた、いびつな状況を少しでも解消し、日本がアジアに謝罪をしよう、けじめをつけようとする動きでした。

90年代に私は、これでいい時代が来ると少し楽観的に考えていましたが、そのころから謝罪に反発する声が日本の政界や世論の一部に絶えずありました。「なぜ何度も謝るのか、自虐的ではないか」「あの戦争はアジアを西洋から守るために、西洋に対してやった戦争ではないか」というわけです。そういう声が、少し過剰に韓国や中国に伝わって、一連の謝罪の効果を薄めたり、韓国や中国に潜在する「今に見ている」という気分につけてきた面があるのではないかと。そして今、経済的にこれだけ中国が大きくなり、韓国もそれなりに大きくなった中で、日本だけがアジアのチャンピオンではないという気持ちが出てきました。それが、最近の日本に対するさまざまな言動に繋がっているのではないのでしょうか。

そうすると、日本人のごく普通の国民感情として、「あれだけ経済協力もして助けたはずなのに」、あるいは「あれだけ謝ってきたのに、なんでいまだにこんなに攻撃されるんだろう」というストレスが社会の中に拡がります。それが昨今の日本の空気であり、その極端な部分がヘイトスピーチになったり、雑誌やその他の激しい論調につながっていると思います。それがまた、中国や韓国を刺激するという悪循環が起きています。

日本はアジアのお皿になろう

さて、最後の地図(図5)を見ると、日本は北海道と本州と九州、四国の四つの島で出来ているように描かれています。普通はそう思います。しかしよく見ると、台湾のすぐ東側まで日本の島々が点々と連なっています。日本列島というのは、実はこのすべてを指しているわけです。かつては、樺太・千島列島、あるいは台湾まで日本が占



(左90度回転)



(右90度回転)

領していた時期もありましたが、現在でも南北に相当長い国だということが分かります。

そして太平洋の右端に小さくあるのが南鳥島、その西南にあるのが沖ノ鳥島です。こういう島も含めると、日本の領海や排他的経済水域はさらに広がり、排他的経済水域を全部合わせると、実は日本という国は世界で6番目の大きさを持っています。大きさもさることながら、太平洋に面してこれだけ長く、アジアの防波堤のように連なっているのが特徴です。この位置が、日本にとっては西洋への窓口でもあったし、アジアへの入り口でもありました。韓国、北朝鮮や中国、あるいはロシアにとっては、太平洋に出ようと思うとき、日本に塞がれているような形になっています。

地図を左に90度ほど回転させてみると、北海道から与那国島まで連なるこの列島が、かつては樺太と台湾まであったということを考えると、アジアに塞がる蓋のように見えます。事実、日本はかつて蓋のようにアジアに覆いかぶさって、その下の方にどんどん力を伸ばしたわけです。朝鮮半島を植民地にして、そのすぐ下に位置する満州をものにし、さらに力を伸ばそうとした時代がありました。そういう記憶が中国、韓国から消えないということだろうと思います。

ところで、これを逆さにしてみると、今度はアジアの重さをこらえている、重みに耐えかねて悲鳴を上げているような日本にも見えます。最近の日本の気分の中には、アジアが、特に中国が膨らんでいる。あるいは軍事的には北朝鮮の脅威が膨らむ。そういう中でいろいろ文句ばかり言われるということで、アジアに潰されるような閉塞感が出ており、そこからもう一度力を取り戻そうという気分も出ているのではないのでしょうか。

そこでどうするか。今日は、日本はどうするかということについて、安倍総理の好きなスローガンを拾いながら、私なりにちょっとアレンジしてみたいと思います。

一つは「日本を取り戻す」あるいは「強い日本」。これは、経済的に元気を取り戻そうという意味では正しいし、賛成です。あるいは「ねばり強い日本」とか「和の精神を尊ぶ日本」を取り戻そうという意味であれば大賛成です。しかし、間違っても戦前のような、力で抑えていくような日本、軍力でよその国に脅威を与えるような日本に戻ってはいけません。

私は、「取り戻さなければならない」と叫ぶほど戦後の日本が間違っていたとは思いません。むしろ戦後の日本こそ、さまざまな国に信頼を得る道をたどってきたのではないのでしょうか。もう一度元気を取り戻す、誇りを取り戻すのはいいのですが、間違っても戦前のような膨張主義に陥ってはいけません。もし日本がそういう道をとるなら、今の中国に対して、あるいは北朝鮮に対して警告を発することができなくなります。私たちに、かつてのわれわれのような過ちを繰り返さないでくださいと、他の国にアドバイスする責任があります。

もう一つ、安倍総理は「普遍的価値観」「共通の価値観」を大事にしようと言います。自由と民主主義、人権、法の支配の大切さは、文句のつけようがありません。その中で人権ということを使うのであれば、まず手本を示すのがいいと思います。特に安倍総理が女性の人権を大事にしているということであれば、従軍慰安婦の問題も日韓両政府が責任をもって解決する。そのイニシアティブを日本がとることこそ、普遍的価値観を実現する道ではないのでしょうか。

もう一つ、安倍総理は「積極的平和主義」ということを言っています。受け身ではなく積極的な平和主義であるべきだということです。しかし、これは安全保障、軍事面での役割を果たすという意味にウエイトが置かれすぎているような気がします。私は、こんにちのような状況においては日本がそれなりに防衛力を整備し、アメリカと連携するのは間違いではないと思いますが、そのことがアジアの緊張を高めては本末転倒です。積極的平和主義というのであれば、いろいろ知恵を絞って平和な環境を作る努力をすることこそ、真の積極的平和主義ではないかと思います。

先ほどのGDPの地図に戻ってみますと、日本は相対的に小さくなったとはいえ、まだ十分な大きさがあります。私は、これは大きさだけでは測れない、質の高いGDPではないかと思います。このごろ「和食」が世界遺産に登録されたということに代表されるような、伝統やソフトパワーが日本にはたくさんあります。先ほどの地図の形では、日本がアジアの皿のようにも見えます。私はアジアの蓋ではなく、アジアの皿になってはどうかと思います。

アジアにはさまざまな問題があります。中国は

大きいゆえに、食糧の問題、エネルギーの問題、環境汚染の問題、高齢化の問題などがあります。こうした問題は、韓国の悩みの種でもあり、アジアに共通の重い課題です。日本にはそういうものに真っ先に直面し、悩み、もがき、それなりに対処してきた歴史と伝統があります。そこで、日本はアジアを下支えするような皿でありたい。あるいはクッション、座布団のような存在でありたいと思うわけです。

アジアに難しい問題が山積する中で、日本はい刺激を与えるべきであり、挑発的な刺激を与えるはいけません。そういう意味で柔らかいクッションでありたいと思います。ご清聴ありがとうございます。ありがとうございました。

**司会** 若宮先生、ありがとうございます。最後はとても楽しい、示唆に富むお話で締めくくっていただきました。若宮先生にご質問がありましたらお受けします。

**質問** ミンと申します。ベトナムのハノイ国家大学から来ました。

先生は、プレゼンテーションの中でパラドックスというお話をなさいました。中国では、共産党という一つの党のもとに市場経済を率いてきたというパラドックスがあります。フランシス・フクヤマ氏は「歴史の終焉」という言い方をしているわけですが、この現実決して歴史の終焉というわけではありません。これをどのようにご説明なさいますか。中国経済は成長しています。これがパラドックスになるとすれば、共産主義の中で市場経済が成長しているからでしょうか。一党システムが市場経済を率いてきたからでしょうか。

**若宮** 私は経済の専門家でも中国の専門家でもあ

りませんが、たいへん鋭いご質問をいただいたと思います。

私は、アメリカを中心とした資本主義経済、特に金融のあり方が近年あまりにも行き過ぎてさまざまなほころびが見え、自由な資本主義が本当にこれでいいのだろうかという疑問が世界の中に生まれたということも承知しています。そういう意味で、中国のような支配体制の中で運用される市場経済に、あるいは一つの可能性があるかもしれないという見方も一部に出ているのではないのでしょうか。ただし、それは果たしてうまくいっているのか。中国の支配者たちがその市場経済のうまみを自分たちの利益に利用して腐敗がはびこったり、市場をゆがめたりしていないか。そういう意味で今、中国のあり様が問われているのではないのでしょうか。

いずれにしても、中国がやっていることは壮大な実験だろうと思います。習近平さんの言葉を借りるなら、二つの100年が当面の目標だそうです。一つ目は2021年。これは共産党創建100年です。それまでに豊かな調和のとれた社会をつくりたいということのようですが、そのころはアメリカを抜いてGDP世界1位になっているでしょう。問題は二つ目の目標です。二つ目の100年は2049年。中華人民共和国創建100年の年です。その年までに富強、つまり富国強兵を実現し、富があって強い国、民主的で調和のとれた理想の社会主義国を作るといっています。そのためにも、さまざまな腐敗に手を付けて改革をしなければならいわけですが、そのスピードは現在見るかぎりには遅々たるものです。このようなことで、一党支配のもとで本当に理想の国に近づくことができるのか。それとも、どこかで破綻をきたすのかは、これからの最大の注目点ではないのでしょうか。